

担任間の日常的な情報交換により児童の様子を把握した事例

知的障害特別支援学級に在籍する小学2年生の児童に対する 通常の学級担任と特別支援学級担任の日常的な情報交換に基づいた 交流及び共同学習

○概要

本事例は、B小学校の知的障害特別支援学級に在籍する2年生のA児が、同学年の通常の学級との交流及び共同学習を行った取組である。B小学校には、全校児童約400名が在籍しており、特別支援学級（知的障害と自閉症・情緒障害）を含む14学級が設置されている。全教職員による児童理解の会が月1回開かれ、特別支援教育を必要とする児童の情報を共有している。また、特別支援教育に関する校内委員会を定期的に行い、手立てや支援の方法などを話し合っている。日頃から交流学級担任（特別支援学級に在籍する児童が交流及び共同学習で共に学習している通常の学級の担任）と特別支援学級担任が情報交換を行い、配慮を要する児童が授業に参加し、自己有用感を高めることができるように心掛けている。交流及び共同学習では、視覚的な支援、活動に見通しをもたせるための配慮、キーパーソンを中心とした座席、グループ構成の工夫などに取り組んでいる。また、対外的な行事にも参加し、体験的な活動を通して自信をもたせることにも力を入れ、成果を上げることができている。

1. 対象児童について

A児は、B小学校の知的障害特別支援学級に在籍する2年生である。軽度の知的障害があり、発語の不明瞭さや非流暢さがみられ、左手指に少し身体の麻痺が見られる。平仮名やカタカナ、漢字の読み書きは、ほぼ身に付いており、日常の出来事を日記に書くことができる。しかし、生活科での観察文、音楽や図画工作などで自分の思いを表現することは難しい。同級生との関わりは良好で、明るく、よい表情で学校生活を送ることができている。一方で、同級生の前で話すことや発表することにはやや抵抗があり、自信がないときには話せないこともある。

2. 活動のねらい

A児は、音楽、生活科、図画工作、体育を、同学年の通常の学級において、交流及び共同学習で学んでいる。座席はA児が話しやすい児童と同じグループにしている。2学期からは、交流学級の中でA児に積極的に関わってくれる児童を介して、多くの児童との関わりを意図的に増やすようにしている。

3. 事前の取組と配慮

交流及び共同学習を進めるにあたり、保護者と連絡を密にとり、本児の実態に応じた教科・内容で進めるようにした。指導に際しては、交流学級担任と特別支援学級担任が連携を強化し、ねらいを明確にして指導に当たるようにした。

校内の教職員を対象に、年度当初に児童理解の会を開き、共通理解を図った。また、毎年、特別支援教育に関する校内研修会を行っている。さらに、特別支援学級の授業を公開することで、児童の障害特性や特別支援教育の重要性について理解を図る機会としている。全教職員が、温かい学級づくりやユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりに心掛けている。

新入児保護者会では、特別支援教育の意義や在り方について説明したり、年度初めのPTA総会に特別支援教育についての資料を載せたりして、理解啓発を図っている。

交流学級でのスピーチや発表に対するA児の抵抗を軽減できるよう、特別支援学級では、毎朝、スピーチタイムや質問タイムの時間を設け、話すことに自信がもてるようにしている。また、交流学級の学習に積極的に取り組むことができるよう、発音の指導（個別指導による口形指導、音読、九九の発音等）を行い、話す力や自己有用感が得られるようにしている。

4. 活動の様子と成果

特別支援学級や交流学級の各教室に単元計画を掲示したり、本時の予定を提示したりして、A児が学習の見通しをもつことができるようにしている。A児は、事前に把握できていることについては、ある程度、自信をもって取り組むことができるので、活動の流れを可能な限り事前に知らせて指導している。

ペア学習やグループ活動を取り入れ、A児が自分の思いを伝えやすくなるようにするとともに、交流学級の児童がA児の見本や手本となるようにしている。

音楽では、A児がスムーズに学習に取り組めるように、作業や身体表現を取り入れ、思いを表現する場を多くもてるようにした。既習曲は自信をもって歌うことができるので、授業の始めに、既習の曲を歌わせたり、活動に見通しをもたせたりすることによって、新しい曲にも抵抗なく取り組むことができた。

タブレット型PCなどを利用して、図画工作の製作手順を視覚的に提示し、作業内容を順序立てて理解したり、確認したりすることができるように配慮している。音楽では、自分たちの身体表現を録画し、確認し合うことで、A児と交流学級の児童で互いの得意なところなどを見つけることができた。ミュージックバトンやドレミパイプなど、操作が簡単で、誰でも音を出すことができる楽器を使用することで、同級生と楽しく音遊びやリズム遊びをすることができた。

5. 事後の取組、今後の課題

特別支援学級にはA児以外の在籍児童もいたために、A児の交流及び共同学習に担任が付き添うことができないことが多かった。そのため、交流学級担任との連絡を密にし、日常の中で折に触れて情報交換をすることで、A児の様子を把握するようになってきた。しかし、全ての時間の学習時の様子を聞くことは十分できず、また、交流及び共同学習の打合せ時間を十分に確保することができなかつたために、交流及び共同学習での取組が想定通りにならなかつた面も否めない。この点については今後、改善していかなければならない。

また、A児の交流及び共同学習の時間のうち、図画工作の製作活動や町探検などの校外活動、調理活動などの時間に交流協力員が支援に入った。今後は、このような外部人材の活用や、十分な学びにつなげていくための授業内容の研究、関係者間の打合せの時間の確保が必要である。